

学生海外調査研究	
「誘い」談話における構造分析 —「交渉話段」における中日言語行動の比較を中心に—	
黄 明淑	比較社会文化学専攻
期間	2011 年 11 月 2 日～2011 年 11 月 8 日
場所	フランス・パリ
施設	パリ大学、パリ国立図書館リシュリュー館、INALGO フランス国立東洋言語文化研究学院等

内容報告

1. 海外調査研究の必要性

本報告者は博士課程において、「誘い」表現における中日対照研究をテーマとして研究を進めている。博士論文では、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における言語行動の比較対照研究を通して「誘い」表現における中日の全体の構造分析を目指している。

今回の発表では、今までの先行研究に踏まえ、以下のような研究課題を設けた。

- (1)中国語母語話者と日本語母語話者の交渉話段の使用数にどのような差が見られるか。
- (2)中国語母語話者と日本語母語話者の交渉話段の使用にはどのような特徴が見られるか。

今までの研究をより深めるためには、客観的な視点から意見を聞く必要があると考えた。そこで、今回の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムを通して、2011 年 11 月 2 日か 8 日にかけてフランスで行われた「東アジア日本語教育・日本文化研究 2011 年度 国際学術大会」に参加し、研究成果を発表した。日本、韓国、中国をはじめとする東アジアとヨーロッパ国々の日本語教育専門分野の海外及び現地の研究者と教師及び発表者から様々な視点からのコメントと貴重なご意見をいただき、自分の研究を見直す良い機会となった。以下では、報告者が参加した国際学術大会で得られた成果について報告する。

2. 海外調査研究の目的及び位置付け

2.1 本研究の位置付け

グローバル化時代の発展に伴い、中国人と日本人の交流やコミュニケーションがますます盛んになっていくと考えられる。コミュニケーションが活発になる一方で、それぞれの文化に起因するコミュニケーションの誤解や摩擦も多く見られ、決して見過ごせないものである。そして、その引き起こされた誤解や摩擦は、単なる言葉や文法的な違いだけではなく、それぞれの文化や習慣、考え方、価値観を反映しているコミュニケーション・ルールの違いから生じる可能性があると考ええる。

山本（1982）が指摘したように、言語は文化の凝縮であり、文化と密接に関連している。また、久保田（2008）は、文化に関する情報不足によって、自文化の見方だけを基に他文化を解釈してしまうことがよくあると述べ、自文化と他文化の類似性と差異、両方を教えることの重要性を強調している。さらに、「文化の差異を分析することによって、相互の誤解や衝突が避けられる一方、類似性に焦点を当てることによって目標言語話者に対する母語話者の肯定的な態度を養うことができる」と指摘している。

本研究では、「交渉話段」に着目し、量的、質的な分析方法を用いて、CNS と JNS の誘い談話における共通点と相違点を比較、考察する。

2.2 先行研究及び本研究の目的

2.2.1 表現形式や発話機能の観点から見た研究

「誘い」¹に関する先行研究で、代表として挙げられるのがザトラウスキー（1993）である。ザトラウスキー（1993）は、電話の自然会話を用いて、日本語の勧誘のストラテジー構造分析を行っている。また発話機能によって発話を分類し、勧誘²の会話の構造について詳細な分析が成されている。黄（2011）は、「共同行為要求」（相手を誘うための共同行為を求める発話で誘い表現を指す。「～ませんか」「～ましょう」などが含まれる。）に着目して、日本語母語話者は「～ませんか。」「～どう？」など、「相手の意向を尋ねる」表現形式を多用する傾向があるのに対して、中国語母語話者は「～まし

よう。」など、「自分の意向を述べる」表現形式を多用する傾向があることが分かった。

2.2.2 誘う側と誘われる側のインターアクションの観点から見た研究

「誘い」に関する言語行動の研究の中、誘う側と誘われる側のやりとりのインターアクションに着目し、分析したものとしては、倉本・大浜（2008）が挙げられる。倉本・大浜（2008）では、日本人学生を対象として誘う側と誘われる側のやりとりを分析している。その結果、誘う側は「行こうよ」などといった誘いそのもの、及び「これから二次回あるんですけど」などの前置き表現や、情報提供が見られ、誘われる側には断りや受諾、「途中で帰ってもよければ」といった条件提示が見られたとしている。また、断りの後には多くの場合再誘いが見られたとしている。

2.2.3 意味公式の観点から見た研究

鄭（2009）は、「意味公式」³の分析方法を用いて、談話完成テスト（DCT : Discourse Completion Test）による日韓の勧誘ストラテジーを対照分析している。その結果、日本語母語話者は韓国語母語話者に比べ、「気配り発話」が多いことや「共同行為要求」の表現に相手の「意向」を尋ねる表現が多いことが明らかになった。それに対して、韓国語母語話者は日本語母語話者に比べ、「前置き」発話の中に「挨拶」や「呼びかけ」、「相手の近況を尋ねる発話」が多いことや「誘導発話」の中に相手のことをほめる発話や相手の不可欠性に言及する発話が多いこと、「共同行為要求」の表現に自分の「希望」を示す表現が多いことなど、意味公式に関して詳細が分析が行われている。

2.2.4 「話段」の分析観点から見た研究

鄭（2006）は、「話段」という分析枠組みを用いて、日本人母語話者と韓国人母語話者の誘い談話における対照研究を通して、「誘いの展開パターン」について分析している。その結果、日本語は「前置き話段⇒誘い話段⇒応答話段⇒交渉話段⇒確認話段」であり、韓国語は「誘い話段⇒応答話段⇒交渉話段⇒再誘い話段」であると結論づけた。

これまでの研究を見ると、「誘い」における構造や対照立場からの言語行動が明らかになっている。また、質的な記述についての研究はいくつかあるが、量的に分析したものは限られている。そこで、本研究では、「交渉話段」に着目し、量的、質的な分析方法を用いて、CNS と JNS の誘い談話における共通点と相違点を比較、考察する。その結果から得た知見から中国と日本の「誘い」言語行為に帰属されたコミュニケーション・スタイルの差異を通して、中日の異文化間コミュニケーションにおいて、どのような問題が起こり得、それらをお互いにどのように対処することが必要であるかを明らかにしていくことに貢献したいと考える。

2.3 本調査研究が博士論文における位置付け

筆者の博士論文では、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における言語行動の比較対照研究を通して、「誘い」表現における中日の全体の構造分析を明らかにすることと、中国の日本の異文化コミュニケーション教育へ提言できることを研究目的に定め、以下の 5 つの研究を行う予定である。

まず、研究 1 では、「誘い」談話における「共同行為要求」に着目して、中国語母語話者と日本語母語話者とコミュニケーションにあわれた共通点及び相違点を検討した。「共同行為要求」とは、「誘い過程において、誘う側が誘われる側に誘い行為に共に参加するよう働きかける発話」であり、「誘い」談話の中心部分である。それを分析することにより、中日の「誘い」談話の言語形式の実態を探ることができる。

次に、研究 2 では「誘い」談話における「誘導発話」に着目してその使用実態及び特徴などを対象に分析する。

そして、研究 3 では「誘い」談話における「交渉話段」に着目してその使用頻度及び特徴などを分析する。

研究 4 では「意味公式」の観点から、「誘い」言語行動の中国語談話と日本語談話における使用頻度、使用順序からその全体の特徴を探る。

最後に、研究 1 から 4 までの結果を博士論文にまとめ、中国語母語話者と日本語母語話者の「誘い」談話における共通点及び相違点、さらにその特徴について注目したい。また、その結果から得た知見から異文化コミュニケーションにおける示唆を提案する。今回の学術大会での研究は研究 3 と、研究 4、研究 5 に位置付け、博士論文の中核になる。

3. 研究方法

3.1 会話収集方法

Brown and Levinson(1987)は、話し手の言葉遣いに影響する要因として力、距離、負担の度合いを挙げている。本研究ではデータ収集の際、中国側と日本側ともに 3 つの要因をすべて条件統制した上でデータ収集を行う。

表 1 会話データ収集における条件統制

	CNS	JNS
言語	中国語	日本語
力	大学の同級生（18 歳—22 歳）	
距離	同等（友人関係）	
負担の度合い	負担の度合いが異なる 2 場面を誘い内容と設定する。	

会話データ収集において、中国人ペアの録音調査は中国で、日本人ペアの録音調査は日本で実施した。録音は協力者が気楽に話せる場所（例えば、教室、学生専用の控え室など）で行った。調査に当たって協力者にはまず、同意書とフェースシートに記入してもらい、その後、誘う側、誘われる側それぞれにロールカードをお渡しし、できるだけ自然な会話をするよう求めた。会話の時間は特に設定せず、会話が終了した時点でできるだけ自然な形で終わらせるように口頭で指示を行った。ロールカードは以下に示す通りである。

【場面 1】食堂への誘い

A：授業が終わりました。あなたは友達の Bさんを誘って食堂と一緒にご飯を食べにいきたいと考えています。これから Bさんを食事に誘ってください。
B：あなたは友達の Aさんからこれから一緒に食事にいこうと誘われました。Aさんと会話をしてください。

【場面 2】アルバイトで忙しい友達をさくらんぼ狩りに誘う

A：クラスメート何人かと来週さくらんぼ狩りにいこうと話をしています。クラスメートの Bさんもぜひ誘いたいです。でも、Bさんは最近家庭教師のアルバイトでとても忙しいようです。これから Bさんを誘ってください。
B：あなたは友達の Aさんからさくらんぼ狩りにいこうと誘われました。でも、最近家庭教師のアルバイトでとても忙しいです。これから Aさんと会話をしてください。

3.2 協力者

本調査は 2011 年 3 月から 6 月にかけて日本及び中国の大学でデータを収集した。調査対象者は中国人ペア、日本人ペアそれぞれ 25 組、合計 50 組である。協力者は全員大学生であり、同じ授業に出たり、同じゼミ、サークルに所属したりしている友人⁴同士である。友人同士の設定にしたのは、年齢の差が分析結果に及ぼす影響を避けるためと、日ごろ同じ大学の同じ学年あるいは同じサークルの友達なら馴染みがあるため、一層自然な会話データが取れると思ったからである。

4. 研究方法

ザトラウスキー（1993）は、「話段」の言語単位を分析単位と用いている。「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分であると定義づけられている。会話の参加者が相互に協力して作り上げて行くものであるため、その大きさは一定していない。また、「話段」とは、2 つの発話からなる「応答ペア」を発話の発話集合に当てはめようとしたもので、それぞれの発話集合を「勧誘の話段」、「勧誘応答の話段」とすることで、発話がどのように関係付けられているかをとらえることができると述べている。

鄭（2006）はザトラウスキーの誘い話段、応答話段に、前置き話段、交渉話段、再誘い話段、確認話段を加えたが、本研究ではザトラウスキー（1993）、鄭（2006）の分析枠組みを援用し、一部修正を行い、以下のように定義する。「交渉話段」とは、「誘われる側の断りや否定的反応に対して、相手が誘いの話にのってくるように相手にとって魅力的な情報を与えたり、興味を引き出すために有力な情報を伝えたることを表す発話文のまとまり」である。

5. まとめ

本研究では、中日の「交渉話段」に見られる特徴を分析することを通して、以下のような結果が示唆された。まず使用頻度から見ると、負担度の度合いによって話段の構成要素が異なってくることが分かった。**CNS** は負担度の度合いに関係なく、「交渉話段」を用いることが分かった。一方、**JNS** の場合、負担度が低い場面 1 では交渉話段が見られず、場面 2 で交渉話段が見られたことが分かった。次に、それぞれの場面で用いられた特徴から以下のようなことが示唆された。**CNS** は多くの場合、何回かのやりとりを通して交渉話段を作り上げていくのに対して、**JNS** はほとんど 1 回のやりとりによって「誘い」談話における交渉話段を作り上げていくことが明らかになった。

中国語の場合は「交渉話段」が多く見られたことから、誘う側は誘いを成功させたいことを目的に積極的に働きかけることが伺える。一方、日本語の場合は相手との意見の衝突を避け、相手の気持ちや意見を尊重し、相手優先で進む誘い方をしていることが伺える。

本報告書では、今回の海外調査研究の研究背景、今後の研究における位置付け、また具体的にどのような行なったかについて述べた。およそ一週間にわたって、自分の研究を東アジア及びヨーロッパの日本語教育界に発信し、得られた知見から今後の博士論文との結び付きについて考える機会が得られた。これからは、今回の調査研究で得られた貴重なリソースを処理、分析して、得られた知見を中国、日本における日本語教育現場にどのように活かすかを考えていきたい。

6. 本海外調査研究における成果

このたび、平成 23 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの支援をいただき、フランス・パリに滞在できたことに、心より感謝を申し上げる。

まず、本報告者の発表においては、本報告者が研究を進めていく課程で疑問に思っていた部分や本報告者とは相違する見方であった部分について、質疑応答やディスカッションを通じて意見交換を行い、貴重なご意見をいただいた。それだけではなく、発表を通して自分の研究を見直すいい機会となり、研究進捗状況の確認ができ、研究結果を踏まえた博士論文執筆計画がなされることが期待される。また、今回の国際学術大会には、日本や韓国、中国、ヨーロッパ等海外の一流の専門家や教授、学者、教授、国内外の研究者が共に参加し、最近の日本語教育の研究の動きや現状、研究方法、異なる視点及び分析方法について議論を行った。

今回の学会参加及び発表を通して、日本語教育の中の教材開発や教授法の検討など、東アジア及びヨーロッパにおける日本語教育の方向及び現状を把握すると同時に、日本語教育における学習者の分析、及び学習者のコミュニケーション能力育成などの問題について、その理論と実践方法を検討し、日本語教育に関わる学習者・支援者・教師・研究者の間で活発な意見交換を行うことができた。それによって、アジア諸国及びヨーロッパの日本語教育研究の新たな可能性が開かれ、新たなディシプリンの確立が期待される。

7. 今後の課題

今回の「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムで得られた成果は、現在まで収集した資料や今回の国際学術大会でいただいたご意見を参考に研究を見直し、お茶の水女子大学の 2012 年日本語言語文化研究学術誌や『人間文化創成科学論叢』等に投稿する予定である。

注

1. 論文によっては、「勧誘」という言葉を使用しているが、先行研究によると「勧誘」は「誘い」と「勧め」（姫野 1998）の両方の意味を持つと考えられるため、本稿では「誘い」という表現を用いる。
2. 本稿では「誘い」という表現を用いるが、他者の文献を引用するに当たっては文献に記入した通りの用語を用いる。
3. 「話段」とは、一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分であると定義づけられている。
4. 「誘い」はある程度関係が築かれていなければ発生しにくいものと考えられるため、両者の関係を友人関係と設定した。

参考文献

- アクドーアン・プナル/大浜るい子 (2008) 「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」『世界の日本語教育』18 号, 57-72.
- 久保田竜子 (2008) 「ことばと文化の標準化についての一考」『文化、ことば、教育』第 1 章 明石書店 1,14-30.

- 倉本美喜・大浜るい子 (2008) 「もう一つの勧誘行動—日本人学生による 2 次会への勧誘行動について」『広島大学日本語教育研究』(18), 57-63.
- 黄明淑 (2011) 「誘い表現における中日対照研究—「共同行為要求」に着目して—」『日本語／日本語教育』第 2 号, ココ出版, 137-153.
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構造—勧誘のストラテジーの考察くろしお出版
- 徐孟鈴 (2006) 「依頼会話の【終結部】の考察-日本人・台湾人・台湾人上級学習者の 接触場面のロールプレイデータを比較して」『言葉と文化』7 名古屋大学大学院国際 言語文化研究科日本語文化専攻, 67-84.
- 鄭在恩 (2009) 「日韓の勧誘ストラテジーについて」『言葉と文化』名古屋大学国際言語文化研究科 10,113-132.
- 鄭榮美 (2006) 「自然会話における「誘いの展開パターン」について」日本語教育学会春季大会予稿集 163~168
- 鈴木睦 (2003) 「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ—日本語教育の視点から」『社会言語科学』6(1),112-121.
- 筒井佐代 (2002) 「会話の構造分析と会話教育」『日本語・日本文化研究』12, 9-21. 大阪外国語大学日本語講座
- 長谷川 哲子 (2002) 「勧誘の談話における日本語学習者の発話の特徴」立命館言語文化研究 14(3),215-224.
- 姫野伴子 (1998) 「勧誘表現の位置-「しよう」「しようか」「しないか」」日本語教育 96,132-142.
- ファン, S.K (1997) 「英語母語話者と中国語母語話者の点火ストラテジーについて—日本語学習者としての「誘い」—」『日本語・日本文化研究』5, 35-49. 京都外国語大学留学生別科
- 藤森弘子 (1996) 「関係修復の観点から見た「断り」の意味内容—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較—」『大阪大学言語文化学』5, 5-17.
- 森山新(2010) 「Holistic Education Of Japanese Language in the Global Era」『お茶の水女子大学 大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」平成 21 年度活動報告書 海外教育派遣事業編』, 126-130, お茶の水女子大学
- 山田七平 (1982) 「日本人と外国語」『国際交流と言語文化』企業内語学教育研究編, 語研.
- 吉田好美 (2010) 「勧誘場面の断りに見られる言い訳と不可表現及び勧誘者の言語行動について—日本人女子学生とインドネシア人女子学生の比較—」『言語文化と日本語教育』第 40 号, 11-19.
- Brown&Levinson(1987)politeness:Some universals in Languageusage.Cambridge University Press.
- Olshtain,E,&Cohen,A.(1983).Apology:Aspeech-actsset.InN.Wolfson&E.Judd (Eds.),Sociolinguistics and Language Acquisition 19-35. Rowley , Massachusetts: Newbury House

こう めいしゅく／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

黄明淑さんの研究は、中国人と日本人の「誘い」談話の対照言語学的研究であり、研究の成果を中国における日本語教育に活かすことを目的といたしております。

黄明淑さんは、平成 23 年度「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムに係わる支援により、2011 年 11 月 2 日から 8 日にかけてフランス・パリで開催された「東アジア日本語教育・日本文化研究 2011 年度 国際学術大会」に参加し、「誘い」談話における構造分析—「交渉話段」における中日言語行動の比較を中心に—というテーマで研究発表を行いました。発表の内容は、「交渉話段」における分析を通して、中国と日本の「誘い」談話の構造が明らかにする、というものです。

発表を通して、研究課題の設定の仕方、データの分析方法などに関して具体的な示唆を得ることができました。さらに、今回国際学術大会に参加し、アジアのみならずヨーロッパで活躍する研究者の方々と交流することができ、問題意識が明確になるとともに研究に関する多くの具体的な示唆を得ることができました。

現在は、今回の発表を投稿論文としてまとめる作業を行っております。また、今回の助成による成果は、博士論文執筆の中核をなすものとして位置付けていく予定で、今後の論文の進展が期待されるところです。

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・佐々木泰子)